

問題解決学習 ―他とどこがちがうの―

清水 毅四郎

一、問題解決学習と初志の会

問題解決学習は私たち「社会科の初志をつらぬく会」の重要なセールスポイントです。本家（元祖）は私たち「初志の会」であると言ってもいいと思います。

近年しばしば、いろいろな立場の人々が「問題解決学習」「問題解決的学習」「問題解決の学習」、さらに似たような「課題解決に向けた学習」を提言しています。それらは互いにどう異なるのかははっきりしない嫌いがあります。日常的にも、「問題を解決する」「問題の解決は困難である」「算数・数学の問題を解く」などと使われます。「問題解決」は身近な言葉であるので人々に容易に使用されてくるわけです。

それでは、私たちの会と他と、その主張する意味はどう違うのでしょうか。

『二十一世紀社会科教育への提言・問題解決学習の継承と革新』（社会科の初志をつらぬく会著 一九九七 明治図書）の「刊行の言葉」で、上田薫会長（元都留文科大学学長）はこう述べています。「問題解決学習は単なる一指導法ではない。明確な教育観、人間観を根底とした教育実践であり、教師の真摯な生きかたに結ぶものである。」

問題解決学習は、教育の歴史でさまざまな捉え方、意味付けがなされてきました。その点から言えば、手垢に満ちた古くて新しい語（言葉）であると言えます。わが国においては特に敗戦後の生活単元学習を改造する学習論としてその主張が展開されてきました。それは、確たる教育観としての経験主義的教育哲学を基盤にして、また然るべき人間観を土台にして主張されてきた学習論であります。私たち初志の会では「わたくしたちの主張」（本誌の末頁を参照）に掲げるように、「子どもの切実な問題解決を核心とする学習」「子どもの切実な関心と強靱な意思にもとづく主体的な問題解決学習の重要性」を、この半世紀近く一貫して主張してきました（昭和三十三<一九五八>年に、会が発足）。

二、「問題」とは何を意味しているのか

まず問題解決学習の「問題」とは何を意味しているかと問われることでしょう。

大きく二つに分ければ、社会科においてはまず「社会的な問題」の意味として使われる場合が多いのです。平成十年版の学習指導要領では新設の「総合的な学習の時間」に関わって、「国際理解、情報、環境、福祉・健康」などの課題を例示として掲げています。「問題」もこのような社会的な「課題」と同じないし近い意味として使われます。現実の社会において誰もが認めうる歴史的・社会的・経済的・政治的な諸課題を学習上の「問題」と

して捉えるわけです。

もう一つは、右の社会的な諸「問題（課題）」と直接、間接繋がってはいるけれども、**もっと一人ひとりの子どもらに寄り添うかたちで、彼らの頭（心）の中で「気になる問題」**とか「尾を引く問題」、「こだわりたい問題」とか「切実な問題」等、個々の子どもの意識に上ってきた個性的な「追究問題」の意味として使われます。私たちの会の場合が**そう**であります。

これまでの、論点の一つは、前掲「わたくしたちの主張」に見る「切実な問題解決（関心）」にかかわって、「豊かな社会になった今日、子どもらにそのように意識されるものはほとんどない」と指摘される点であります。問題解決学習で同じく「切実な問題（関心）」という場合、昭和二十年代に子どもらを取り巻いていた実生活の状況（物質的に貧しく人々は飢えていた）と今日では明らかに異なっています。例えば敗戦後の昭和二十二・二十六年版学習指導要領では、戦前の教授法からの転換という意味で子どもらの「必要と関心」に即する学習指導の必要性を強調しています。しかし「必要と関心」そのものを示さない子どもらの問題状況についての記述はなかなか見当りません。

そこから、「切実な問題（関心）」として輪郭のはっきりしたものが最初から子どもに在るのではなくて、学習する過程で子どもにとって次第に「切実になってくる」と言うべきだと主張されるわけです。私自身も近年は「問題解決学習とは子どもの生活経験との密接な交渉のなかで醸成されていく関心や願いによって構成されるところの切実な問題の追究を通して展開されていくもの」と述べてきました。

各実践記録においては、子どもらが「学習対象に関わりを持つ」「周りを深める」「問題意識を持つ」「こだわりを持つ」などと表現されています。さまざまなレベル・段階の関心（問題）の持ち方を右のような言い方で捉え直そうとしたものと思われま

す。今日の、少なくとも物質面では飽和状態に近いというべき生活の中で、当該の学習対象との関連においても、自らの「願いや必要や関心」を意識化しないのが今日の子どもの姿だ（「平和ぼけの姿だ」）などと言われます（しかし私自身には附属小併任三年目を体験してきて、子どもたちはあらゆる生活の面で問題意識を顕在化させていくだけの余裕がないからだけではないのか、子どもらは相変わらず自分らの「声なき声（願い）」に、大人がじっくり耳を傾け心に向けてくれることを必要としているように思えてなりません）。子どもらの生活経験や体験活動と（教師により）意図的に結び付けられた言葉と思考を通じてはじめて、「問題（関心）」が彼らの意識に浮上（喚起）されてくるわけです。「問題（関心）」の構造（奥行きや幅広さ）は子どもらの生活経験との密接な相互交渉（交流）の中で次第に輪郭を表してきて自覚されてくるのです。「切実な問題（関心）」とは必ずしも最初からはっきりと意識されて存在するものではありません。

三、「解決」の意味をどうとらえるべきか

次に、問題解決学習における「解決」の意味をどう捉えるべきでしょうか。

「算数の問題を解く」と言うように、一般には「結論を出す」「ひとつの正解・答を出す」「一件落ち着させる」というイメージで受け取られる場合が多いわけです。会では「未解決の解決」も含むと説明されたりします。解決という場合、必ずしも一つの答に向かって「追い求める」意味ではなく、むしろ自分自身の（頭・心の）内に向かって「追い求める」意味で使われるのです。「問題解決」は手段的な意味を持つのであり、目的はそのことを通して子どもの頭の中の考えがより一貫性を持って繋がっていくようになること、子どもが責任のとれる考え方を育成していくことです。それは、民主主義社会を維持していく学校教育の目的にも繋がります。民主的な社会は、一人ひとりが「自由と責任」、「権利と義務」を与えられ、それぞれ掛け替えのない存在として認められるべき社会です。一人ひとりの子どもらの学習が究極的にめざすべきことは、彼らの考えが繋がりをもち矛盾を克服しようと自らを律する（自立していく）よう育成されることです。問題解決によって一人ひとりがそれなりの系統性を内に築こうとするのが目的です。立場（能力・必要感・生活経験等）の異なる子どもらが、外的な物差し（例えば学問的系統）に無条件に寄り掛かり依存しきってしまうのではなく、個性的系統をそれぞれの内に成立させることが目的です。例えば、ある単元で然々と考える子どもが他の単元では相反する考えを平気で使い分けるその矛盾を放置させない学習です。自分の内なる「問題」に向かい追究していくのを意味するのです。

四、子ども一人ひとりを大切にすることの意味

子ども一人ひとりを大切にすることは、右に述べてきたように個性的な繋がりと連続性・一貫性の育成を大切にすることであり、子どもを甘やかす、子どもに迎合することではありません。

また、文化遺産を軽視することでもありません。学問の成果を盾に自らの追究を放置することを批判するのです。社会科のように主として人間と社会や人間と自然の相互関係を追究する教科において、名誉・権威・権力のある「偉い人」の見解に下駄を預けるとするのはどうかと思います。授業で言えば、教師の見解が一番価値ありと見なし、学級の子どもらの見解にみるこだわりや切実さが軽視、無視されてはならないことを私たちの会は主張しているのです。

今日問題解決的な学習は、知識内容の受身的習得よりも積極的な構えや機能的な能力（表現力・コミュニケーション力など）の育成の方が重要であるという理由で提唱される場合が多いのです。その脈絡のなかで、問題解決学習は学習の一方法（仕方）と見られかねません。例えば平成十年版の指導要領第一章総則の記述が目に入ります。「総合的な学習の時間」の取り扱いとして「学習活動を行うに当たっては体験的な学習や問題解決的な学習を積極的に取り入れること」と。問題解決的な学習という学習活動の仕方に関心が向けられ

ています。二十一世紀の世界において、(貿易立国として明治期以来今日まで西欧列国に追いつき並び、他方で急成長諸国からの追い上げにあわてる状況の)日本が生き残りをかけ競っていくには、「新しい人材養成」が学枚教育の目標や課題となり、そのために積極的な姿勢と問題解決能力、機能的な能力などが大切だと主張されます。問題解決能力や機能的な能力の育成を図るのももちろん大切です。が、子どもの考え方が連続性を保ち一貫したものとして形成されることにも教師は着目したいのです。学習の人間形成論的な意味や価値についても注目したいのです。問題解決学習は、私たちが生きることに伴うごく自然な学習であり、人の一生は鳥瞰図的に眺めれば、様々な問題を解決していくことの連続であります。

問題解決学習は一つの学習論であります。そこから、子ども研究・評価論、子どもが実際に向き合う教材論(材をどう導入すべきか)、教材・学習材と対応する教科目標・内容論(内容の代替、複線的重層化、合科的工夫、単元間構造化などへの配慮)、学習問題の組織化論、学習形態論(個別、グループ)、教師の指導体制論(ティームティーチング、教科担任制)、学校経営論(時間割の組み方、学級の人数、教科書教材の扱いなど)といった点へと、教育論的諸課題に広くつながっていくのです。もちろん、学枚という集団の場で個々の子どもの「切実な問題解決(関心)」を尊重していくことの難しさが常に問われてきます。

しかしながら私たち問題解決学習論者は、子どもの「切実な問題解決(関心)」重視の立場に立って、既成の学校知のあり方を問い直し、学問観を問い直し、人間回復(個の真の自立・確立)のあり方を探究しようとしているのです。

(滋賀大学)

(社会科の初志をつらぬく会編『考える子ども』N.273、2002年5月号所収、pp.8-11)